

# 図書館に「知友」を探しに行こう

私が勉強している中国の古典には、読書・書物をめぐる言葉が多く残ります。ここでは唐代の詩人・韓愈<sup>かんゆう</sup>の詩を紹介しましょう。韓愈が仕官を目指して故郷を離れ、都・長安に出た時の作で、大学入学後に新生活を始めた皆さんの状況と、少し似ているかもしれません。

長安 百万の家、門を出でて之<sup>ゆ</sup>く所無し。<sup>あ</sup> 豈に敢えて幽独<sup>たつと</sup>を尚ばんや、世と実に参差<sup>しんし</sup>たり。/古人 已に死す<sup>いえど</sup>と雖も、書上 其<sup>ことば</sup>の辞有り。/巻を開きて読み且つ想えば、<sup>せんざい</sup>千載も相い期するが若し。/門を出でて各おの道有り、我が道は方に未だ夷<sup>まさ</sup>らかならず。/且く此の中に息わん、天命 吾を欺<sup>たい</sup>かず。(「出門」)

世間と相容れず行き場を失った若者。一冊の書物を開いて思いをめぐらせれば、千年の時を隔てながら、作者とびたりと思いが通じ合う。若者は自らの使命を信じ、再び歩き始める…。

情報が飛び交う現代では考えられぬスローテンポの話と感じられるかもしれません。しかし一方で、読書の本質は変わらないものだとも思われます。読書は作者との対話であり、また読む者に思わぬ変化をもたらすこともある。そしてそこには恐らく、一定の時間が必要です。

書籍のデジタル化も進み、読書のスタイルも多様になってきました。だからこそ、学生時代にはぜひ実際に図書館に足を運び、自由に書架をめぐり楽しさを体験し、自分のための一冊を見つけてもらいたいと思います。

ぜひ図書館に、「知友」を探しに来て下さい。

滋賀大学附属図書館副館長(教育学部教授) 二宮 美那子

